

セカイにひとり 中 (三)

麦 (穀物P)

目次

第一部	セカイにひとり	3
第六章	ミズ・カフエイン・ファイター	4
第二部	短編「雨」	111

第一部

セカイにひとり

第六章 ミズ・カフェイン・ファイター

(World Line Kigumi-D to Kigumi-C via Syaro)

「ココア……」

「ココアちゃん……」

リゼちゃんと千夜ちゃんが困惑した目で私の方を見た。その視線に、私も同じ困惑の表情で返すことしかできなかった。

「ハハ……どハハ………?」

* * *

シャロちゃんを探すとみんなが改めて決意してから数日後、ココアお姉さん（仮）からの連絡が来た。シャロちゃんがいる世界が見つかり、半月以内に接続することができそうなので、それまでに接続を促進できるような『まじゅつ』の触媒を用意しておいてほしいとのことだった。

「触媒って、あの私をさんざん痛めつけたステッキのこと?」

『あれも必要だけど、あとひとつ、シャロちゃんとのつながりが感じられるようなシンボルになるものがあつた方がいいかなって。科学の範囲外のことは手探りなんだけどね』

「うーん、なんかよくわからないけど、思い出の品っぽいものを探したらいいのかな？」

『そんなところ』

「わかった！　ところで、思い出の品があればあのステッキを完全封印したりできない？」

『……今のところまだ無理かな。うん、がんばれ』

無情な言葉に涙した。もうあのバイオレンス・ステッキは使いたくない……。

シャロちゃんとのつながりが感じられそうなものとして、ひとつのティーカップのことが思い浮かんだ。だいぶ前、まだリゼちゃんと再会する前に、本当ならシャロちゃんの家であるはずの空き家の庭で見つけたものだった。昔から落ちていたようには見えず、少し不自然なくらいに綺麗なものだったそ

れを、自分の部屋の棚に飾っていた。並行世界の私との会話をつないでいたティップーから視線をずらして少し上の方を見ると、そのティーカップは変わらずそこにあつた。

「やっぱり、これかな……」

あとひとつ、千夜ちゃんやりぜちゃんが持っている物の中に、より役に立つものがあるかもしれない。すぐに二人に連絡を取って、いい物がないか探してもらうことにした。

『たんすの引き出しの中に、シャロちゃんからもらったかんざしがあつたわ』
『シャロからプレゼントされたうさぎのぬいぐるみを発見した』

メッセージを送ってから三十分もしないうちに二人から返事が来た。品物はすぐに見つかったらしい。

『よかった！ これで一人一つ、シャロちゃんお出迎えパワー三倍だね！』

『そうね』

『そうだな』

それから日を置かずして、ココアお姉さん（仮）からの次の連絡があつたので、すぐに『まじゅつ』を発動するのに最適な場所へ向かった。

ただ、例によつて、私の腹部を虎視眈々こしたんたんと狙っていたステッキが部屋の中で暴発してしまった。最初は華麗に避けたものの、その後油断してうっかりステッキの上に載つてしまい、バランスを崩したところなぜかステッキがお腹に命中した。

私が倒れる大きな音と一生の恥になる酷い声がラビットハウスに響き渡つてしまい、危うくサキさんから外出禁止令と強制おやすみモードを受けてしまうところだった。

「それじゃ、私の『まじゅつ』を始めますよ。えへん！」

「魔術……！」

千夜ちゃんが目を輝かせている。確かにこういうのが好きそう。

「ところでココアちゃん、なんでその魔法のステッキはテープでぐるぐる巻きなの？」

「えっと、これは……」

「千夜、実はあのステッキには魔物が取り憑ついていて、魔術のために取り出すたびに暴発してココアのお腹を的確に打ち抜くんだけ」

「そうなの？」

「うん……何をどうやっても必ずゴボツつてなっちゃって、今日ここに来る前にも一撃必殺されちゃった。次は鎧よろいでも着たほうがいいのかな？」

「鎧よろいがあるならうちのを貸すぞ」

「うちには兜かぶとがあるわ」

「ありがとう。必要になったら言うね」

うっかり話が脱線してしまったけど、そのおかげで緊張がほぐれたからよかった。

『はろはろ、いやこんばんはかな？ こつちも準備はできたよ』

「わかった、それじゃ行くね」

ステッキの封印を解いて構え、『じゅもん』を思い浮かべる。本当にきちんと意味が通るかどうかわからない言葉だけど、でも呪文としては一番効果的だと言われているその言葉を叫んだ。

「サイエンティフィックマジカルフュージョン！ 世界の扉よ、開け——！」

過去二回経験した、何かがごう、と通り過ぎていくような感覚があたりを丸ごと包み込んだ。

……ん？ 何だかいつものより感じる圧が強いような気がするけど。

『——え？ 何これ、こんな出力になるなんて聞いてない！ 何が起きてるの！?』

ティッピーを介してつながっているココアお姉さん（仮）が慌て始めた。

「何だこの感覚は!? つぶれてしまいそうだ!」

「飛ばされちゃう!?!」

『あぶない!』

並行世界からの叫び声と、何かから弾き飛ばされるような感覚が同時にやって来て、そこで意識が途切れた。

* * *

ここまでの様子を振り返ってみただけど、これは事故って言っているのかな。見知らぬ世界。ううん、風景的には木組みの街の近くに似ていて、見慣れていないわけじゃない風景なんだけど、何かが違った。同じ世界の知らない土地に飛ばされたのとは違う、もっと奥底から感じる違和感があった。

私、リゼちゃん、千夜ちゃん、ティツピーは、みんな『まじゅつ』を発動させた時と同じ姿だった。私達の服もそっくりそのままだった。

ふと思いついて、ティツピーを抱いてココアお姉さん（仮）にテレパシーを送ってみただけど、全く反応が無かった。並行世界の私が不在の時でも感じる、別の世界とつながる感覚が何も無かった。

「リゼちゃん千夜ちゃん、どうしたらいいのか……？」

「わからん。見当もつかない」

「どうしたらいいのかしら……」

万事休すだった。

ここに三人（&うさぎ一羽）で立ちつくしたままでは問題が解決しそうになるので、情報収集を始めた。まずは基本、今のまわりの光景。今いる場所は一面黄金色の麦畑だった。そろそろ収穫が近いのかな。

「小麦が収穫間近ということは、季節的ずれはほとんど無いと言っていいな」

「おー、リゼちゃんすごい！」

「いや、これは学校で習っているはずだが」

「そうね♪」

呆れた感じが思いきり伝わってくるリゼちゃんの声と、なんかちよつと楽しそうな千夜ちゃんの声に白旗を掲げた。

「勉強します……」

麦畑のさらにその先を見渡すと、近くに小さな街が見えたので、そこに行ってみることにした。

歩いて十分ほどでたどり着くと、一軒のお店を見つけた。雑貨店というか、小さい街のなんでも屋さんみたいな感じ。

「こんにちはー」

「はーい」

店員さんの姿が見えなかったので声をかけると、奥の方からおばあさんの声が聞こえてきた。少しして、棚の陰から顔が見えた。

「あら、可愛い娘さんが三人も！ 珍しいねえ、ありがたやありがたや」

なんか手を合わせて祈られてしまった。

「私達、近くの大きい街の方からお仕事でこのあたりに来てたんですけど、

ちよつと道に迷っちゃって」

千夜ちゃんが話を切り出してくれた。確かに、道に迷ったと言えば怪しまれにくいし、大きい街への道を教えてもらってそこに行けば、何か探す手がかりがあるかもしれない。

「あらあら。それは大変ねえ。近くの駅に行くといいいわねえ。駅までは歩くと三十分、電車に乗ったら一時間ちよつとで着くよ」

「ありがとう！」

お礼代わりと自分達のおやつを兼ねて、お菓子をちよつと買ってお店をあとした。手持ちのお金がこの世界でも使えるかどうか心配だったけど、問題ないみたいだった。

駅に着いたところできつぷを買ひ、ホームに行こうとしたら駅員さんに止められた。ティップピーはそのまま電車に乗せたらいけないらしい。ふたが閉ま

る大きめのかごに入れたらいいとのことだったので、近くのお店で買って、ティップーにはその中に入れてもらった。

少し待つてやってきてきた電車に乗って、ようやく一息つけた。

「さて、とりあえず近くの大きな街に行ける電車には乗れたんだが」

「どうしたらいいのかしら。このセリフ、ついさつきも言った気がするのだけ
れど……」

「うーん……よし、泊まる場所とかお金とか心配事は無限にあるけど、さつきもおばあさんに助けられてなんとかあったんだし、なんとかかなると思う！ うん、なんとかする！」

「そうね、ココアちゃんの言う通りだわ」

「だな。やってみなくちゃ始まらない」

半分は自分を勇気づけるための言葉だったけど、リゼちゃんや千夜ちゃんか

らの言葉ももらえて、もつと勇気が出た。みんなで力を合わせれば、どんな問題だってなんとかすることができると。

大きい街に着いて、電車を降りて改札を出た。もちろん人が多い。百の橋と輝きの都とと同じくらいかもしれない。広い街に出たのを感じ取ったのか、かごの中でティツピーが前後上下左右に激しく動いたので外に出した。ティツピーはぴよこぴよこはねて、一瞬だけ私の頭に飛び乗ってくれたけど、チノちゃんの頭の上と違ってしつくり来なかったのか、最終的にはリゼちゃんの手元に収まった。ティツピーのもふもふぶりに顔がにやけているのが分かった。

まずは駅前に鎮座する大きい地図が描かれたモニュメントを見て、最初の行き先を考えることにした。

「まずどこに行こっか？」

「やっぱり高台から街を眺めるところからじゃないか？」

「そうね。冒険の始まりは全体を見渡すところからだわ」

リゼちゃんと千夜ちゃんの意見が一致した。私も同意見なので全会一致、すぐに決まった。

「よし！　じゃあまずはこの山に行こう！」

駅の近くで飲み物とお弁当を買い、街を楽しみつつゆつくり歩くこと一時間、小さい山の山頂に着いた。広場にあつた時計は一時を指していて、お昼ごはんにちょうどいい時間帯だった。

ちょうど空いていたベンチに腰掛け、お弁当を食べることにした。ティツピーにも何かあげようと思つたら、リゼちゃんの手から飛び出して、すぐ近くにある草地でぴよこぴよこ飛びはね始めた。

「こうしてみるとやっぱり丸々毛玉だな」

「わたあめみたい。今度お店で出すメニューにあんな感じのトッピングを加えたいわ」

もこもこ気持ちよさそうだけど、心配なことと気になっていることがひとつあった。

「もう少し暑くなってきたら熱がこもりそう。ところであの毛を刈っても本体は丸かったりするのかな？」

「あれ、身体はふつうのうさぎの形らしいぞ」

「そうなんだ……ガックシ」

「そこは落胆するところか？」

話をしている身体の疲れがちよつと落ち着いてきたあたりで、いただきまます、と手を合わせて弁当を口に運んだ。

「おいしい！ やつぱりハイキングした後のごはんは最高だね！」

「ごはんが全身にしみわたるしあわせ〜」

千夜ちゃんの方から、このまま溶けて水になってしまいそうなくらいほわほわな雰囲気の幸せオーラが出ていた。ここまで疲れが取れるとは。

「だいぶ疲れてそうな感じだな。麦畑の中を歩いてたのを合わせたら、全部で二時間くらいか。私は日頃から鍛えているから大丈夫だが、二人はどうだ？」

「さすがにちよつとこたえたわ……よよよ……」

「私はパン作りで鍛えてるから大丈夫！ ……でも上半身だけ……足はつらいよー……」

「一対二か。今回は搜索が長丁場になりそうだから、体力を浪費しないようにしつつ、徐々に体力をつけていくか。まさに実地訓練だ。覚悟はいいか？」

「「ラジャー！」」

久しぶりに鬼軍曹つぼくなったりゼちゃんに二人そろって敬礼をした。

ごはんを食べてエネルギーをチャージしたところで、街を見渡した。ここ
の街は海が近くて、港の方には大きな船が見えた。海岸から少し離れた駅の近く
には公園があり、大きな時計台も見えた。

「すごい街だねー」

「この街だけでも探すとなると大変そうだな」

「何か手掛かりがあるといいな」

ひとしきり景色を楽しみつつ考えを巡らせていると、後ろから声を掛けら
れた。

「あら？ ココアさん、リゼさん、千夜さんではないですか。あとあちらで
はねているのはティツピーさん？」

「青山さん!」

この世界にいるとは思わない人と不意に出会ってしまった。

ティッピーを回収して青山さんと一緒に山を下り、麓の喫茶店に入った。ティッピーにはもう一回かごの中に入れてもらった。

飲み物と軽食を頼んで一息ついてから、青山さんに今までの話をした。この青山さんは『この世界の私達』のことは知っていて、だからこそさつき声をかけてくれたわけだけど、今ここにいる『違う世界の私達』が今置かれている状況は知らない。

何も知らないと完全に空想みたいな話ばかりだったけど、青山さんは途中で話を遮ることなく、にこにこしながら聞いてくれた。その途中で時折真っ白の原稿用紙に何かをメモしていた。元の世界や他の世界で見えてきたように、白い

原稿用紙が束になってバッグに入っていたけど、原稿の締切は大丈夫なのか。この世界でも凜ちゃんさんに追いかけられている？

「ふむふむ。なるほど」

「何かわかりました？」

「ええ」

私の質問に青山さんは満面の笑みで返事をくれた。

「そうですね。まずはみなさんと情報を共有して、認識を合わせようと思います」

青山さんが口火を切り、この世界の「紹介」が始まった。

「まずはこここの『世界』……と呼ぶべきでしょうね、ここにも木組みの家と石畳の街があります。そして、みなさんはその街の住人です」

「ここにも木組みの街があるの!？」

「ええ、ココアさん。ただ、この街から少々……というか、かなり離れています。速い長距離列車を使っても六時間くらいはかかるのではないのでしょうか。私がここに来る時もそのくらいかかりましたし」

「そんなに遠いんだな……」

「どうしましょう。それだけ遠いと電車代もきつと高いと思うのだけど、今お金をほとんど持ってないわ……」

「もともと外出した時は世界をつないですぐに帰るつもりだったので、一応お財布やスマートフォンは持って来ていたけど、その中身はきつぷ代には足りそうもなかった。」

「旅費は大丈夫です。私が見なさんの分も稼ぎますので」

「どうやって?」

「ちよつとあそこに見える大人の社交場で、くるくる回る数字をきれいに揃えるアレを」

「それはだめ！ お財布がどつかんしちゃうよ!!」

私達の元の世界で青山さんがお財布をどつかんさせてしまつて、凜ちゃんさんがその巻き添えを食つてしまつた事件のことが思い出された。

「よくご存じですね。いっぱいどつかんしちゃいます」

「……さすがにやめような？」

このまま青山さんに任せると、本当に青山さんの財布のお金が綺麗さっぱり消し飛んでしまいそう。危険な道に行こうとしているのを止めなきゃ。

「冗談はさておき、みなさんを送り届けるのはお任せください。あと、たずね人のあてもなんとなくありそうな気がします」

「本当ですか！」

「みなさんがおっしゃった特徴の方はわりと見かける方のような気がします。私と行動範囲と行動スタイルが重なっているんですかね？」

とても気になる耳寄りな情報だった。この世界でのシャロちゃんの居場所は全く見当がつかないので、それっぽい話なら何でも調べてみたい。ほんのわずかでも可能性があるならそこに懸^かけたい。

「でも、みなさんのお話と年齢がだいぶ違うような感じなんです。みなさんの知る方は高校生くらいだと思いますが、私が見かける方は大学生よりもさらに年上のお姉さんの人なんです」

「シャロちゃんのお母さんだったりするのかな？」

「そうかもしれない。ひとまず行つて偵察して、それから話を聞く価値は十分あると思う」

「私もそう思うわ。シャロちゃんにつながるりそうなものなら何でも確かめた

い。この目で」

「わかりました。いつもの行動パターンですと、今日の夕方に私の行きつけのスーパーマーケットで出会えそうです。その時間を狙って探しましょう」

その時間まではあと三時間ほどある。せっかくなので、この街によく来ているという青山さんの案内で街を観光することにした。

「青山さんはこの街には年に何回くらい来るの？」

「そうですね、年に四回くらいは来ます。ちょうど季節に一回になりますね」

「結構遠くまで来てるんだな」

「木組みの街と、百の橋と輝きの都の次に好きな街ですのよ」

ここは木組みの街をはるかに超えるにぎやかさで、先日旅行で行ったり、千夜ちゃんを探したりした都と同じくらいか、それ以上あるかもしれない。

とことこ歩いて、食べ物のお店や屋台が立ち並んでいるエリアに来ると、千

夜ちゃんがまわりを見渡しながらつぶやいた。

「さつきごはんを食べたばかりだけど、もうお腹が空いてきちやったわ〜」

「私も！ 何食べよつか？」

「おいこらココアと千夜、無駄遣いするんじゃないぞ。きつぷ代は青山さんがなんとかしてくれるらしいが、それ以外にもいろいろいるかもしれないんだから」

「ちよつとだけならいいでしょ〜、ね〜ココアちゃん？」

千夜ちゃんに合わせて『ね〜？』って言うてリゼちゃんを説得しようとしたら、青山さんの声に遮かきとられた。

「いいですよ〜、全部お姉さんに任せなさい！」

「あつ、青山さんが私の決めゼリフ取った！」

「……まあ、青山さんがいればとりあえずなんとかなるか」

リゼちゃんが額に手を当てて難しい顔をしていたのでよしよししたら、ぺしつと頭をチョップされた。ちなみに、リゼちゃんの顔は真っ赤になって、さらにそわそわしていた。

街角に出ていた屋台で美味しそうな焼プリンを買って、近くの噴水広場のベンチに腰掛けた。天気が良かったのと、ちょうどいい感じに風が吹いていて涼しいので、みんな気持ちよさそうにリラックスしていた。

「風が気持ちいい〜」

「ですね〜、私一番のお気に入りスポットです〜」

「ではプリンを頂きましょうか」

みんなで手を合わせていただきますをして、さつそく一口。

「！」

今までで一番の美味しさに、天国に飛んで行ってしまいそうになった。千夜ちゃんの方を見ると、驚きの表情で固まっていた。

「千夜ちゃん？」

「……完敗だわ」

「かんぱい？」

リゼちゃんの問いかけに、千夜ちゃんが放心した目でつぶやいた。

「このなめらかな食感に、玉子の風味を最大に引き出したその腕前……私、職人さんを探して弟子入りしてくるわ」

ふらりと立ち上がってどこかへ向けて歩き始めたので、慌てて止めに走った。

「ちよつと待て、シャロを探すのはどうするんだ」

「そうだよ、シャロちゃん探さなきゃ！」

私トリゼちゃんとか千夜ちゃんをつかまえて揺さぶると、

「——ハッ！ 今私は何を……」

千夜ちゃんの目に光が戻った。やっぱり意識がどこかに行ってしまったみたいだった。

「よかつた。千夜、さつきはプリンを作った職人さんに弟子入りするって言うてふらふらとどこかに歩いて行こうとしたんだが、覚えているか？」

「え、私そんなことを？」

「このままシャロちゃんのこと忘れて弟子入りしちゃうかと思っちゃった」

「私……プリンに心を奪われてシャロちゃんのことを忘れかけてた……？ 親友失格だわ……」

千夜ちゃんの目からまた光が失われかけたので、もう一度引き戻す羽目になった。

「大丈夫！　こうして戻ってきたんだから！　ね？」

「そうですね。私なんてしょっちゅう凜ちゃんのことを忘れて街をふらふら出歩いちゃうんです」

「いやそれは反省したほうがいいんじゃないか……？」

気を取り直してプリンをもう一回楽しみ、もし今日シヤロちゃんに会えたらお土産として渡そうと思つて、保冷剤つきでもう一個買った。

「さて、そろそろ夕方ですね。このくらいの時間にみなさんが探していらつしやる方がここを通ると思います」

「よし、張り込み開始！」

道端の看板の陰に隠れて、すぐ先の交差点を見る。すると五分もしないうちにそれらしき人の姿が見えた。

「ええ、あの方ですね。今日はなぜか急ぎ足みたいですが」

「曲がり角を過ぎたら追うぞ」

「ええ」

すぐに飛び出せるよう構えて、その人が通り過ぎるのを待つ。青山さんの言う通り、かなりの早足でこちらに向かつてきていた。

「あと三分で始まつちゃう、急がないと……あつ」

私達が隠れている場所の目の前で盛大にずっこけた。見事にまつすぐスライディング。

「大丈夫!？」

「大丈夫か!？」

慌てて駆け寄り、その人を助け起こした。幸い目立ったすり傷はない。顔や身体つきなどの見た目や雰囲気シャロちゃんに似ている。声も似ているよう

な気がしなくもなかった。

「いたたたた……ありがとう、大丈夫よ。あ」

「どうしました？」

「セール開始から三分経っちゃったわね……今日の特売は諦めてメニューを変えなきゃ」

遠い目をして哀しげかなにつぶやくお姉さんに掛ける言葉が見つからないでいると、千夜ちゃんが進み出てお姉さんの前にかがみ、手を握った。

「まだ間に合うわ。絶対。行きましょう」

「え……ええ、そうね。やってみなきゃ始まらないわね。行くわ」

千夜ちゃんとともに立ち上がったお姉さんは、汚れを払って力を入れ直し、目指す方向を向いた。

「シャ——お姉さん、私達も一緒に行つていい？」

「ええ。あ、そうだ。会ったばかりで悪いけど、ちょっと頼まれてくれないかしら」

シャロちゃん似のお姉さんからの頼みは、今まさにスーパーで始まった特売セールでの戦利品回収だった。もし特売品があったら、お一人様一点限りの品を買うのに協力してほしい、とのことだった。その依頼を断るはずもなく、総勢五人でスーパーに向かって走った。途中から千夜ちゃんと青山さんが遅れ始めたので、私とリゼちゃんて押して行った。前は私もへろへろになるところだったけど、多少はリゼちゃんと一緒にした特訓の成果が出たのかな。

ティップピーを表でかごと預け、人でごった返すスーパーに入ると、さらに人垣が出来ている場所があった。あそこに特売品が集められているらしい。

「作戦を伝えるわ。長い黒髪のあなたは奥の方に回り込んでサラダ油、体力がきつちりついてそうあなたは右手側からパン粉、そっちのふらふらお姉さん

は人が少ないあっちの冷蔵ケースからお肉、最後にあなたは左奥のスパゲッティと小麦粉をよろしく。私は正面突破で缶詰たちを狙いに行くわ。このような時でないともまとめ買いで貯蔵できないものね……準備はいい？」

「ラジャー！」

「ミッシヨン・スタート！」

お姉さんの号令で一斉に特売会場に向かった。私はスパゲッティと小麦粉を獲りに行く担当を任された。パンを作る修行とラビットハウスでの華麗なお仕事の舞の実力を活かせば、たくさんの人を避けて目的のものに近づくのだからすぐにできる！

まわりのライバルの手が伸びてくる前に目的の品物を全部かごに入れて前線を離脱、もとの場所に帰還した。

「隊長！ 目的のものを全部獲得しました！」

「私もミッション・コンプリートだ」

「……ゼエ、ゼエ、なんとか、取って、きたわ……」

「お肉……」

「皆の者ご苦労！ あーよかったー……月に一回のいろいろな意味でのチートデーと今月の保存食がいっぱい調達できたわ」

お姉さんがその場で満面の笑みを浮かべながら感動の涙を流し始めたので、とりあえずお会計をするべくお姉さんをレジまで押していった。

それぞれ戦利品を抱え、ティップも忘れずに連れてみんなでお店を出たところで、お姉さんから改めてお礼があった。

「みんなありがとう！ お礼と言っちゃなんだけど、うちでご飯でもどうかしら？」

「いいの!？」

「ええ。私の暮らしの救世主だもの。それくらいはして当然よ」

「それならちよつとお邪魔しようか？」

「ええ、いいわね」

「じゃあうちに案内するわ。ちよつと歩くけど」

お言葉に甘え、みんなでお姉さんの家に行つてご飯を食べることにした。：
：ただ、このお姉さんが言う「ちよつと」は、私達には少し長い道のりだった。

三十分近く歩いて、ようやくお姉さんが住む家に着いた。とても小さいながらも一通り揃った綺麗なお家で、木組みの街のシャロちゃんの家に似た感じだった。

「ごめんね。四人も上げるにはかなり狭いところだけど」

「綺麗だねー」

「ごちんまりとしても必要十分なものがあって、いいわ」

「こういう書齋が欲しいですね」

お姉さんがお茶を淹れ、お茶菓子をテーブルに並べてくれた。お土産代わりに、さつき買っておいたプリンをお姉さんに渡した。幸いにしてこぼれたり崩れたりしてはしていなかった。

「ハーブティーを淹れたけど、そういえば苦手かどうか聞いてなかったわね。これはカモミール。あと家には他の品種のハーブティーがいくつかと、紅茶があるわ」

「お茶が好きなんですわ、コーヒーはお飲みになるんですか？」

青山さんが尋ねたのを聞いて、はっとなった。もしこのお姉さんがコーヒーを飲めないなら、元の世界からここに飛んできたシャロちゃんである可能性が高まる。リゼちゃんや千夜ちゃんも同じことに思い至ったらしく、三人で視線

を合わせた。

「いえ。コーヒーはちよつと苦手なの。飲むことには飲めるんだけど、ちよつと……」

これはもしかしたら。

「そういえば、コーヒーで酔っちゃう人がたまにいるって聞いたことがある」
ちよつとした誘導をやってみた。私はシャロちゃん以外にコーヒーで酔っ
ちやう人を知らないし、シャロちゃんだけに起きる現象なのかもしれない。

「私はそれ。お酒は飲めるんだけど、コーヒーはカップ一杯も飲まないうちに
すぐくハイになっちゃって。まわりの人はそれを知ってるから飲ませないよう
にしてくれるんだけど、たまにカップの取り違えでうっかり飲んで……気付い
たらまわりの人が優しくなぐさめてくれて、自己嫌悪しちゃう」

「そうなんだー」

「珍しい体質なんだな」

「大変ねえ」

三人ともその体質のことならよく知っている。とてもハイテンションになって、パワーも普段の何割増しにもなるという。

「ま、コーヒーさえ飲まなかつたら、紅茶のカフェインはあまり問題ないのよね。でもそつちもあまり飲まなくて、ハーブティーが主になってるわね」

額うなずきながら話を聞いていた青山さんが、手元のバッグから原稿用紙の束を取り出した。

「ふむふむ、なんだか新しい小説のアイデアが湧いてきた気がします。：タイトルは『カフェイン・ファイター』にして、そこから中身を膨らませていきましよう」

「カフェイン・ファイター、ねえ。私のあれはカフェイン・バーサーカーかも

しれないけど」

お姉さんが本日二回目の遠い目をした。

「ま、あまり話していると冷めちゃうから、お茶にしましょう」

「こ、いただきます」

今までハーブティーを飲んだのは、フルール・ド・ラパンに行った時と、シャロちゃんの家にお邪魔した時くらいだった。カモミールにはリラックス効果があると学んだのもその時。シャロちゃんの博識に感動しつつ味わった。本当にカモミールの効果が出たのか、この世界に来てから緊張したままだった私の心が安らいだ。

「なんか心も身体もぼかぼかしますね」

「リラックス」

「安らかになるわ」

「いいなこれ……」

「ね？ みんな何か疲れてそうだったから、これを選ばせてもらったわ」

「ハーブティーのソムリエールだね！」

「ありがとう」

みんなでゆつたりとしたひとときを過ごしていたところで、お姉さんがふと気付いたように話し始めた。

「そういえばまだ名乗ってなかったわね。私は桐間紗路、まわりからは『シャロ』って呼ばれてるわ。……あらどうしたの、いきなりこの世の終わりみたいな顔で驚いて」

やっぱりシャロちゃんだった。歳が十歳くらいは違っているけれど、名前も雰囲気も一緒に、カフェインが苦手なものと一緒に。スーパードで特売を狙うところや、家がこぢんまりしているのも。

「シャロ……ちゃん」

「ほとんど初対面でいきなりちゃん付けかつ、ま、いいけど。なんか長い髪の毛のあなたは初めて会った気がしないものね。その若いお二人も。たぶん初対面のはずなんだけど、つい最近まで一緒にいたような、そんな懐かしさを感じるわ」

「そう……ですね、なぜか私もそんな気がします」

千夜ちゃんがぎこちなく敬語で答えた。不安そうな雰囲気が出ていた。私達のことをかすかに憶えていそうで、シャロちゃんの元々の記憶が取り戻せる可能性は十分にあると分かったけど、それがいつになるかは分からない。

千夜ちゃんの不安を知ってか知らずか、シャロちゃんは千夜ちゃんに話の続きを促した。

「それは良かったわ。名前は？」

「千夜——宇治松千夜です」

「千夜、いい響きの名前ね」

「ありがとう」

それを皮切りにお互いに自己紹介をした。ここのシャロちゃんはすでに二十八歳、この街で事務のお仕事とハーブティー専門店のお仕事の掛け持ちをしつつ、独立して喫茶店を開くための準備をしているらしい。

「だいぶお金は貯まって、先週あたりひとつたつ物件も見に行ったりしたんだけど、なんか胸騒ぎがするのよね。『今はまだちよつと待て』って誰かにささやかれているような」

もしかしたら、忘れていた私達のこと、元の世界のことを思い出そうとしている動きなのかもしれない。何かさらに思い出してもらうための材料をさりげなくシャロちゃんに知らせることができないかな。

「そういうのを『第六感が告げている』ってお母さんやお姉ちゃんから聞いたことがある気がする。無意識のうちになにかが引つ掛かっているかもしれないから、ちよつと待った方がいいかも」

「そうね。ココアと同じ感じのことをハーブティーのお店の店長からも言われたわ。知り合いにも同じような謎の不安を感じた人がいて、でもそれを振り切って独立したら、お店がなんかうまくいかなくてすぐ閉めることになっちゃったって。その人はしばらくしてやり直して、今は新しいお店を軌道に乗せているけど」

「なるほどな。やっぱりそういうった不思議なことはあるもんなんだな……今の私達はそれ以上に不思議な事態に巻き込まれているけれども」

リゼちゃんが少し小声になったのがうまく聞き取れなかったらしく、シャロちゃんがリゼちゃんの方を見た。

「リゼ、何か後半のほうよく聞き取れなかったけど、何か喋った？」

「あ、いや何でもない、です」

シャロちゃんがりゼちゃんを呼び捨てにしているびっくりした。これはレアイベントだね。あと、りゼちゃんからシャロちゃんに向けて敬語で喋る光景もとてもレアだった。いつもは必ず『りゼ先輩』だから、とても新鮮。

ただ、もし全部を思い出した時にこの事も覚えていたら『りゼ先輩に何て口の利き方してんのよ私くくくッッッ!!』ってテーブルに頭を打ちつけそうなので、すぐ止められるよう気をつけておこう。

「それで、みんな遠いところの街から来てるんだってね。木組みの街？ はここからどのくらいかかるの？」

「街の大きな駅から特急で行って、途中で一回乗り換えて全部で六時間くらい

です」

「あら、結構遠いのね。でも乗り換え一回だけで行けるんだ」

確かに遠いけど、乗り換えが一回だけというのは意外と行き来しやすい感じ。でも、今の私達はちよつと困ったことになっていた。

「でも、たまにお金が足りなくなつて、困った時はいつものお花屋さんで二日くらいお仕事をしています」

青山さんの宣言に、シャロちゃんがあからさまに呆れ顔になった。お仕事先で『いつものお花屋さん』が出てくるあたり、お金が足りなくなるのは常習犯らしい。

「お金が足りなくなるって、あなたのお仕事ってどんなの？」

「はい、小説を書いたり、あと、ちよつと雑誌にも連載記事を書いたりしています」

「へえ。ペンネームは？」

「青山ブルーマウンテンと申します」

「うんうん青山ブルーマ……へ!? 青山ブルーマウンテン先生!？」

シヤロちゃんが突然飛び上がって叫んだ。その勢いで倒れかけたのを慌てて支えた。

「せせせせ先生が、超有名なのにどうしてここに、え、あ、えーと、サインください！」

「喜んで」

混乱しつつも、とりあえずは青山さんのサインをもらうことにしたらしい。

飾り棚の引き出しから色紙とサインペンを取り出して青山さんに差し出し、流れるようにサインが描かれるのをニコニコしながら眺めていた。

「へー、青山さんってこんな感じのサインなんだ」

「ココアさんもいかがでしょうか？」

「せっかくだし、サインしてもらおうかな」

お財布とスマートフォンだけでこの世界に飛ばされてしまったので、サインをもらう色紙をシャロちゃんにもらった。流れでリゼちゃんと千夜ちゃんも色紙を受け取り、青山さんのサインをもらった。

「四人分の色紙を並べると壮観ね……」

シャロちゃんのつぶやき通りだった。左上の方にそれぞれの名前が入り、真ん中に青山さんのサインが描かれていた。右下には私達のかわいい似顔絵つき。

「ありがとう！家宝にするね！」

「いえいえ」

サインをひとしきり眺めたところで、私達の身の上話をしつつ、これから

の動きについて話し合うことになった。だいぶ長い話をシャロちゃんは根気良く聞いてくれていたけど、話が終わったところで腕を組んで考え込んでしまった。

「——それで、話をまとめると青山先生以外みんな揃って身一つでここまで来た、ということになっちゃうんだけど。その丸っこいうさぎと一緒に」

「そうとしか言いようがない事態だな……」

シャロちゃんの言葉に返事をするリゼちゃんも、困惑度百パーセントの声音だった。

一方、ティッピーは丸っこいいうさぎ呼ばわりされたのが不服だったのか、威嚇^かぎみにぴよこぴよこはね始めた。でもこっちのシャロちゃんほうさぎが苦手ではないらしく、ティッピーに向かってひらひらと手を振ってあしらって

た。そしてシャロちゃんはため息をついて、今度はジト目で私と千夜ちゃんの方を見てきた。うさんくさいものを見るような目な気がした。

「なんで全然知らない場所にいきなり移動して、しかもお金もほとんど持っていないような感じになっちゃたのよ……タヌキかキツネにでも化かされた？」

「そうね、うさぎさんに招かれるまま、私達みんながこの鏡の国にワープしてきちゃったのかもしれないわ」

正直な話、とても説明に困る事態だった。詳しいことはココアお姉さん（仮）に聞かないと分からないけど、肝心の連絡手段がなかった。ティツピーを抱きしめて念を送っても何も無かったし。向こうから探し出して呼びかけてくれるのを待つしかないのかもしれない。

「私が大人の威信いしんにかけてみなさんを連れて帰ります！　と言いたかったところですが……」

「青山さん、ひよつとしてお財布がどっかんしちゃってる？」

「いえ今回はどっかんしてません。してませんが……ちよつと取材で食べ過ぎちゃったのかもしれない……。私とみなさんのきつぷ代を稼ぐために、いつものお花屋さんで一か月くらいお仕事をしないといけなくなりまして……」

目に見えてしょんぼりしてしまつた青山さんをなぐさめたいところだつたけど、青山さんの告白の中身がちよつとそれどころじゃなかつた。

「ところで青山さんはどこかにお泊まりしてるの？ お泊まりの代金は払えそう？」

私の問いに、青山さんは力なく答えた。

「いえ、今日この街に来たばかりで、これから探すところでした。ただ、お金も魔法のカードもないので、公園で野宿コースでしようか……」

「野宿ダメ絶対！」

もしかして、青山さんを含めてみんなどこかに泊まることができそうもないのでは。

「ひよつとして、私達はこの街で泊まることも、木組みの街に帰ることもできなくなっちゃってるのか？」

「みんなお金持っていないしね……」

念のためお財布をもう一度調べたけど、みんなの分を合わせても一人分のきつぷ代にもならなかった。万事休す。

「どうしよう……」

「どうしましょう……」

みんなで顔を見合わせたけど、それだけでは解決する話でもなかった。ヒツチハイクで頑張つて帰るか、それともどこかの喫茶店でアルバイトをしてお金を貯めるか。とにかくしばらく動けるような状態じゃなくなってしまった。

少し続いた重い沈黙を破ったのは、シャロちゃんがパンツ、と打った手だった。

「ほとんど詰んじやつてるんだから、途方に暮れてても仕方ないわ。ひとまず一週間ここにいなさい？ ぎゅうぎゅうになつて雑魚寝ざこねすることになるけど宿代はタダよ。セールの買い出しは手伝ってもらうけど」

「泊まってるいいの!？」

「お金ないんでしょ？ 恩人のかわいい子やお姉さんを追い出して野宿させるわけにはいかないじゃない」

思わぬ助け船に、とても嬉しくてシャロちゃんに飛びかかるようにハグをしに行つた。

「ありがとうシャロちゃん!!」

「シャロ神様」

「いきなり飛びつかないのココア、そして千夜は変な呼び方すな！」

私と千夜ちゃんとシャロちゃんがもみ合うようになっていたところに、リゼちゃんが思わずおすと近付いてきてぴよこんと頭を下げた。

「ありがとうシャロ」

「リゼもそんな遠慮しないの。ちよつとした恩返しとお節介だから。困つたらお姉さんに任せなさいな。……私も実はあんまりお金は無いけど」

「あ、ああ」

リゼちゃんがシャロちゃんを相手に顔を赤くしてもじもじするのは珍しいなと思いつつ、シャロちゃんのセリフを反芻はんすうしていたらとんでもないことに気がついてしまった。

「あー！ シャロちゃん私のセリフ取った！ 『お姉ちゃんに任せなさい』は私のせんばいとつきよなんだから！」

「何の話よ……あとココア、あなた絶対『専売特許』の単語を知らずに言葉の響きだけで言ったわよね？」

「〜♪」

「下手な口笛でごまかさない！」

大きな問題が解決できたので安心して、しばらく力が抜けてしまった。

シャロちゃんの家にはしばらく泊まるとなると、洋服や下着、パジャマが必要だった。近くのお店まで買い出しに行き、お代はシャロちゃんに払ってもらった。この街でお仕事をしたらすぐに返すとみんなで言ったけど、シャロちゃんから断られた。

「学生が社会人の懐具合ふとこづくあいを心配しなくていいの。苦しいといったって多少は何とかなるし。気になるならこの代金は出世払いつてことにしておくわ」

「「ありがとうございます」」

「十年後にでも気が向いたら返してね」

交代でお風呂に入つて疲れを癒^{いや}し、部屋にお布団を敷きつめた。シャロちゃんのおうちにあつたものと、シャロちゃんのお勤め先の店長さんが話を聞きつけて持つてきてくれた分でなんとか足りた。

「こんななにぎやかになつたのはこの家に来て初めてね」

「これは女子会と言えるでしょうか」

「確かにこれは女子会だね！ 夜通しお話ししよう！」

「元気ねココア、アラサーの私にはちよつと辛いかも。明日もお仕事だし」

「みなさんのお話を聞きたいところですが、ちよつと眠くなつてきました」

「……」

「まあ、何日かお世話になることだし、明日以降にでもしたらどうだ？」

「そうね……私もちよつと歩き通して疲れたかも」

「うーん、わかった！　じゃあ明日か明後日で」

「そうしよう」

電気を消して横になったら、あつという間に眠りに落ちてしまっていたみたい。次に目が覚めた時には外が明るくなっていた。

朝起きて、洗面所を順番に使いつつ身支度をして、簡単な朝食タイム。

「さて、私は昼前から夜まで仕事だけど、みんなはどうする？」

「なにしようか？」

今この街でできることはあまりなさそうだけど——あ、これだ。

「シャロちゃんが働いているお店に行ってみたい！」

私の発案に千夜ちゃんがすぐに乗ってくれた。

「いいわね。でもみんなが一気に押し掛けて大丈夫かしら」

「お客さんとしてなら大丈夫よ。あ、でもみんなお金無かったわね。私がひとまず立て替えた形にしくわ、こつちも出世払いね」

「いいの？」

「まあね。社会人ですから」

シャロちゃんの言葉に、青山さんが居心地悪そうに目を泳がせていた。

「シャロさんがとても眩まぶしいです……溶けちゃいそうです……」

「ああ青山さんはもつとすごいです！ だって世界のみんなを楽しませてますし！」

「そう言っていただけるととても嬉しいですよ」

青山さんに笑顔が戻った。確かに青山さんはお財布をどつかんさせちゃったりするちよつぴり心配なおトナの人だけど、シャロちゃんの言う通り、小説や

エッセイを通して世界のみんなを楽しませてくれているんだ。

いろいろな人がつながり合って世界ができていて、そこに欠けているものがあると、やっぱり寂しいし悲しい。そこに楽しみがあると、日々の力になる。

そう考えていると、私にとつてまだ欠けているものが思い浮かんだ。ようやくシャロちゃんに出会うことができたけど、まだ探すべき大切なヒトはいっぱいいる。マヤちゃん、メグちゃん、そして……チノちゃん。

三人のことを思い浮かべると、心がくりとした。私達のことを忘れて別の世界で楽しく暮らしているのか、それとも全部思い出して寂しがってたりしないか。気になってきてなんだか落ち着かなくなつた。

「ココアちゃん？　なんかそわそわしてる？」

「……へ？　あ、いや大丈夫大丈夫！　シャロちゃんのお店ってどんなメニユーかなーって考えてただけ！」

千夜ちゃんが心配そうに私の方を見つめてきたのであわててごまかした。

「ココア、心配事があつたら私に絶対相談してくれよな？」

リゼちゃんがぐいっと覗き込んできたので思わずのけぞった。近くでじつと見つめられると心配事が見抜かれてしまいそうだった。

お昼前、シャロちゃんにぞろぞろとくつついて行く形でシャロちゃんのお仕事先に向かった。お姉さん二人と高校生三人、なかなか謎の組み合わせだった。今日は月曜日、高校も新学期が始まっているので、私達の年代の集団は少し目立っているかもしれない。

「ここが私が勤めているお店よ」

「なんかシックな感じ、ラビットハウスみたい！」

私がおもった言葉に、シャロちゃんが少し首をかしげながら返した。

「ラビットハウス？ ココア達の街にあるお店？」

反応までのその微妙な時間差と反応そのものから、シャロちゃんがまだラビットハウスのことを思い出していないのは明らかだった。だからきちんと紹介することにした。

「うん！ こんな感じの喫茶店で、コーヒーが美味しいんだ。タカヒロさんとサキさんが夫婦で切り盛りしてて、私とりぜちゃんが休みの日にお店のお手伝いをしてるの」

「そうなのね。ココアとりぜが……。なんでかわからないけど、お仕事の光景がくつきりと思い浮かんだわ。ココアは日なたぼっこしてサボってそうね。それをりぜが支えてる感じ」

図星だった。シャロちゃんの言葉の矢がとても鋭い……。

「いや、ココアは働き者だぞ。いつもニコニコ明るくて、パンを焼くのもうま

いし、夕食当番の時のご飯も私に負けないくらいの腕だし」

「コーヒーは？」

「……ラテアートは上手いぞ！ それだけはココアがラビットハウスで一番かもな」

リゼちゃんが私のことをなんとか褒めて売り込んでくれてるけど、ちよつと苦しい感じになってきた。はい、コーヒーを淹れるお仕事はずつと修行中です。チノちゃんやタカヒロさんの方が圧倒的に上手いので任せてました。この世界だとサキさんも超一流だったので、お店で時々練習してるけど、まだお客様にお出しできるレベルには程遠い感じです。初心者マーク。

「ま、コーヒーを淹れるのがんばれば上手くなるわ」

「はい……」

「ところで千夜は？ どこか別のところ？」

「私は実家の和風喫茶で仕事をして——ます。『甘兔庵』あまうぎあん っていういます。お昼は高校、夜と休みの日は武者修行をして、いつか全世界に甘兔の名を響かせたい」

千夜ちゃんはやはりぎこちない敬語だった。普段が仲良しで普通に喋ってるから、こうなるのは当たり前か。

「壮大な夢ね。いつかこの街に支店ができればライバルになるし、今のうちから甘兔をよく研究しなきゃね」

「ええ。良きライバルとなれるよう、がんばるわ」

シャロちゃんがお店の裏手に行ったところで、私達はお店に入った。

「いらつしやいませ。青山さんとそのご一行さんですね、シャロさんから話は伺っています」

お店のオーナーさんにはもう伝えてあったらしく、スムーズにみんなで座れる良い席に案内された。

しばらくするとバックヤードから制服姿のシャロちゃんが出てきた。

「お待たせ。改めまして、いらつしやいませ」

シャロちゃんが優雅に一礼した。木組みの街のフルール・ド・ラパンで仕事をしていた時はかわいらしいメイド服風だったけど、こちらはスマートなパンツスーツ風の制服だった。私達が知っているシャロちゃんより十歳年上ですらりとしているので、よりかつこよさが増していた。

「かつこいいねシャロちゃん！ あいさつに『お嬢様』ってつけてみない？」
「ここはメイド喫茶でも執事喫茶でもないわよ」

「えー、似合うと思うんだけどなー。千夜ちゃんはどう思う？」

千夜ちゃんの方を見たら、頬を赤くしてシャロちゃんの方を見たまま固まっ

ていた。

「千夜ちゃん？」

「え？ あ、ええ。おいくらかしら？」

「何が？」

いきなり不思議な返事をした千夜ちゃんに、シャロちゃんが怪訝けげんそうな顔で尋ねたら、さらにとんでもない答えが返ってきた。

「シャロちゃんを専属の執事で雇やとう時のお給料？」

「いきなり私をヘッドハンティングしようとしなさい！」

このままだと元の世界に戻った時にシャロちゃんが言った分のお金を本当に払って雇ってしまいそうだったので、肩をゆさゆさして正気に戻ってもらった。

「ごめんなさい。ついシャロちゃんに見とれちゃって、いつでもそばにいてほ

しいなつて思つちやつて……」

「まるでプロポーズみたいね。ま、私もいろいろやらなきゃいけないことがあるからここからは動けないけど、その気持ちはありがたく受け取っておくわ。もし私が失業したら雇ってもらおうかしら」

「よろしくね」

いつもだとシャロちゃんの方が恥ずかしさで真っ赤になつてぷりぷり怒つちやうところだけど、やつぱり大人の余裕？　なのかな。逆に千夜ちゃんが恋する乙女みたいになつちやつた。

「素晴らしいですね、先ほどのセリフを小説のアイデアとして使わせてもらつてもよろしいでしょうか？」

「青山先生の小説にですか!?　結構恥ずかしいですけど、でもさっきのセリフがお役に立てるならば喜んで……」

ちよつと訂正。青山先生の方がさらに大人の余裕を見せていた。

シヤロちゃんお勧めのハーブティーセットを頼んで、それぞれ違う香りや水色、味を楽しんで一息ついたところで、重要な話を切り出した。

「作戦会議をしよう」

「ヒッ！ ……ココア、いきなり怪談みたいな怖い声を出さないでくれ……」

「ごめんねりぜちゃん。ちよつとえらい司令官が丸いテーブルにぐるって回って座ってるあれをやってみたかったんだ。ほら、ちようど今そんな感じで座ってるし」

「面白そうね♪」

千夜ちゃんがニコニコして返してくれた横で、青山さんがうんうんと頷いていた。

「この感じ、なんだか『円卓の騎士』みたいですね」

「なんかかつこいいい！」

「この円卓は大きくて荘厳な感じじゃなくて、むしろ小さくかわいらしい感じだけだな」

「かわいらしい……じゃあこの集まりの名前は『ぴよんぴよんパーティー』にしよう！」

「いや待てココア、名前に異存はないがどこからぴよんぴよんが出て来たんだ？」

「私達の木組みの街がうさぎさんでいっぱい、あとは私達にもこもこのティツピーがいるから？」

私の答えに、リゼちゃん、千夜ちゃん、青山さんがしばらくじつと考えるポーズを取って、それから何かが分かったみたいに笑顔で頷いてくれた。

「いいわね、この名前……ココアちゃんのネーミングセンスにちよつとジエラ

シーを感じちやうくらい」

「とてもいいと思います。今度タイトルを付ける時にご協力をお願いしたいです」

チーム名が決まったところで、新メンバーのシャロちゃんに伝えて感想を尋ねたら、『かわいらしいわね。いいんじゃない？ 気に入ったわ』と星五つをくれた。ばんざい！

次の日、お散歩ついでに元の世界に戻るための手掛かりや、まだ見つからないチノちゃん、マヤちゃん、メグちゃんの三人を見つける鍵になるものがないか探そうと、家を出る準備をしていたら、ティツピーが急にびよこびよこ動き始め、それからすぐに私のところに飛んで来た。抱き止めたところでティツピーが喋り始めた。

『あーあー、マイクテスト……よし。じゃなかった！ みんな無事だった!?!』
「並行世界の私！」

遠く離れた世界の私、ココアお姉さん（仮）の声だった。

青山さんやシャロちゃんを含め全員が一室に集まり、会議が始まった。

『そちらの世界の青山さんとシャロちゃんは初めましてだね。並行世界のココアです。二十五歳、街の国際バリスタ一流スパイ弁護士アンド時空エンジニアをやってます』

「……うさんくさいわね」

シャロちゃんがココアお姉さん（仮）のあいさつを一刀両断してしまった。

『ウツ……、でも、みんなのお姉ちゃんは厳しい評価にも屈しないよ!』

「私の方が三歳年上の二十八歳だから、あなたは妹ね」

『うう……ごめんみんな、お姉ちゃんは完全に敗北しちゃったよ……』

ティップーの向こうでえぐえぐ泣き始めてしまったココアお姉さん（仮）が復活するまで軽く十分はかかってしまった。私もみんなのお姉ちゃんでありたいと思っているけど、さすがにここで泣いちゃうまではないかも……。

『コホン。取り乱しました。まずは、みんな遅くなつてごめんなさい。私としたことが、急激な時空転移エネルギー増大に対処できずに、みんなを路頭に迷わせちゃった。たぶん用意してもらった触媒が多過ぎたせいかもしれない』

この世界を自分達の世界と接続する時に用意した、シャロちゃんにつながりそうな三つの物が思い出された。あれが多過ぎたみたい。

「ううん。こうしてまた連絡が取れるようになったし、すぐにシャロちゃんも見つけられたし、青山さんにも会えたから良かったよ。終わりよければすべて

良し、だよ、そっちの私」

「『見つけられた』……って、あなたたち私のこと探してたの？」

シャロちゃんが困惑した風に尋ねてきた。そうだ、まだシャロちゃんには私達が何をしにきたのかを伝えてなかった。ちょうどいい機会なので全部を話すことにした。

「うん。話すとちよつと長くなるんだけど——」

今までのことを、ココアお姉さん（仮）やりぜちゃんや千夜ちゃんの助けを借りてすべて話した。シャロちゃんの表情は当然ながらすべてを疑うような雰囲気だった。

「私が青山先生以外のみんなと同じ街に住んで、本当はあなたたちと同じくらしいの年齢、ってねえ。いきなり信じろっていう方が無理よ」

『うん。それは想定の範囲内』

「この話をいきなり信じちゃったら、逆に心配になっちゃうくらいだから大丈夫」

「信じてほしくて話をしたのに『いきなり信じるな』とは、なかなか面白いことを言うわね」

シャロちゃんが苦笑いを浮かべて頭をかき、そしてため息をついた。

「はあ……。でも、実際問題あなたたちは私と同じ名前の、そして私を十歳若返らせて高校生にしたような見た目の子を知っている」

「うん」

「でも、あなたたちが探している、あなたたちが知っている『私』は、本当に今ここにいる大人の『私』なのかしら？ どこか別の世界に別の年齢や環境にいる『私』がいたりしないの？ そしてそっちが本当に探している『私』だっ

たりしない？」

シャロちゃんからの問いは鋭かった。でもココアお姉さん（仮）はその質問も想定の内だったみたいで、間に沈黙を挟むことなく、よどみなく答えた。

『並行世界のシャロちゃんは、おそらくたくさんいる。それは私やりぜちゃん、千夜ちゃん、青山さんも同じ』

「じゃあ——」

やはり人違いじゃないか、そう言おうとしたシャロちゃんの言葉を遮ってココアお姉さん（仮）は続けた。

『でも今回は、世界が不測の事態でバラバラに分かれてしまっただけから、それぞれ別の世界に行ってしまったみんなの位置と世界のつながりを全部チェックしたんだ』

「どうやって？」

『私の理論と観測機器を使って。ただ、内容を説明すると日暮れを通り越して明日の朝になっちゃうから、ある種の魔術みたいなものだと思うてもらってもいい。高度に発達した科学は魔術のように見える、ってやつ。あるいは本当に魔術なのかもしれない』

「私は世界をつなぐ時に『まじゅつ』を使ったよ！」

『確かに、そっちの私に使ってもらっているのは確かに魔術としか呼べないものなんだ。私の知る科学、あるいはそっちの世界の科学でも説明はまだできないと思う』

「はあ……」

『で、元の世界から飛んでしまったシャロちゃんを見つけて、そっちの私の手で世界をつないで、そして今ここにいるシャロちゃんこそが私達が探していた

シャロちゃん』

シャロちゃんの疑いの表情に困惑が交じり、もう理解を棚上げにしてすべてを流そうとしている感さえ出てきていた。しばらく沈黙があつて、シャロちゃんが首を振りつつ口を開いた。

「やっぱり、あなたたちの言うことはさすがに信じられない。私の過去の記憶にはあなたたちのことが全く出て来てない。写真のアルバムでも見たことがなかった」

「そうだよね……」

「ただ、あなたたちは私の過去以外のことをあまりにも知り過ぎている。まるで過去の私に会って話をして全部聞いているみたいに」

「！」

「うん。さすがに信じられないけど。でも、あなたたちの言うことが本当な

ら、私にはいずれあなたたちが知る通りの記憶が思い出される、というか書き加えられることもあるの？」

『うん。それは確實だと言える』

またしばらく沈黙があつて、顔を上げたシャロちゃんの目は真剣だった。

「わかつた。信じられないのは変わらないけど、あなたたちの仮説を気に留めて暮らしてみるわ。記憶が戻るといふか生まれるにはどのくらい時間がかかるか分かる？」

『確實には分からない。ただ、リゼちゃんは世界がバラバラになってから私達と合流するのに二か月かかつてる。千夜ちゃんとの合流もそこから一か月かかつた』

「そんなにか……」

『ただ、これはあくまでもこの私とそつちの私が実際に体験している時間の長

さで、みんなの実年齢とは特に関係がないんだ。事件が起きた時にそっちの私
の世界の日付が二年前に戻ってしまったから、そっちの私はそっちの世界で高
校一年生なんだけど実は十八歳』

「わけがわからないわね」

「私もわけがわからなくなつたぞ」

「同じく……」

首をひねり過ぎてねじれそうになつてゐる三人に対して、青山さんは目をキラキラさせてすごい勢いで何かをメモしていた。

「とても興味深いお話だったので、ちよつと内容やインスピレーションをメモしています」

「さすが作家さん……」

みんなで話し合い、リゼちゃんや千夜ちゃんの時みたいに、元々の世界でのエピソードを話したり一緒に体験したりして、思い出すためのきっかけをいっぱい作ろうと決めた。ただ……。

「このシャロちゃんはどうさぎを怖がらないから、リゼちゃんとの出会いを再現できないね。困った」

「それなら、私が昔からの細かい幼馴染^{おさなじみ}エピソードを全部再現するのはありかしら？」

「一番強いと思う！ それがダメだったら最終手段としてコーヒーを一服盛るしか……」

「物騒なことを言うなココア。手がつけられなくなるぞ」

いざとなったら本当にコーヒーを一滴入れたり、コーヒーの匂いを漂わせたりしようかと思っていたけど、さすがにドクターストップならぬリゼちゃんス

トップがかかってしまった。

「あなたたちの知る私って、カフェインでそんなに暴れるの？」

「超ハイテンションでお祭り騒ぎみたいになってるな」

「そこは変わらないのね私……。あ、だから絶対にコーヒーは飲ませないですよ!?」

「はーい♪」

「千夜のその笑顔、いまいち信用ならないわね……」

ジト目のシャロちゃんをみんなでよしよししてなだめたら、『子ども扱いしない!』と逆にみんなわしゃわしゃ返された。

次の日からは、青山さんはいつもお世話になっている花屋さんにお仕事に行き、シャロちゃんがお仕事に行っている間は、私達は街を巡って、チマメ隊の

みんなの行方につながる手掛かりを探した。

ただ、やはり木組みの街や、百の橋と輝きの都の両方から離れてしまっているせいか、特段の手掛かりは得られず、単なる街めぐりになってしまっていた……。

「このエリアの喫茶店も一通り巡った感じかな」

「コーヒーにもだいぶ詳しくなれたよ！」

「ラビットハウスに帰ったら活かせそうか？」

「たぶん。まだサキさんやタカヒロさんにはかなわないかも」

サキさんの名前を出した時、千夜ちゃんがちよつと困った風の顔で手を挙げた。

「ココアちゃん？ そのサキさん、って方のことなんだけど……」

「サキさん？」

「ええ。昨日の夜にココアちゃんが話してくれた時からちよつと考えてたのだけど」

千夜ちゃんは少し斜め上、空の方を見つめ、言葉を選ぶように続けた。

「サキさんが、もしこのシャロちゃんと出会った世界にもいるとしたら、それはキノちゃんがこの世界にいないことと何か関係があるのかしら」

リゼちゃんと同じ疑問に行き着いていた。さすが、頭が鋭い。

「その点はリゼちゃんとも前話したことがあるんだ。サキさんは元々の世界ではキノちゃんのお母さんだったし、やっぱり何かのカギだと思う。特にキノちゃんの行方にかかわりそうな気がする」

「そうね。私はまだサキさんとは一瞬会ったきりだから、木組みの街に帰ったからお話ししてみたいわ」

「わかった」

知らない街のことを知ることができるとはとてもわくわくする。でもやつぱり、いるべきみんながまだいないことがとても気になった。

夕方、シャロちゃんの家に帰って、留守番してもらっていたティップイーをもふもふした。しばらくしてシャロちゃんが若干ヨレヨレになつて帰ってきたら、みんなでシャロちゃんにマッサージをしてリラックスしてもらった。お世話になりっぱなしだから少しはお返ししなきゃ。青山さんも帰ってきたら溶けちゃつたので、念入りにマッサージして人の形を取り戻してもらった。

夕食を食べて一息ついたら、千夜ちゃんを中心に、木組みの街でシャロちゃんと一緒にしていたいろいろなこと再現をして、記憶を取り戻すのにながらないかひたすら試してみた。

——というのは半分くらい建前で、本当のところは久しぶりにシャロちゃん

と遊びたかった。たぶんみんなそうだと思う。途中から記憶を取り戻そうと頑張っていることを忘れてトランプやすごろくを楽しんでいた。

シャロちゃんは最初はめんどくさそうで目も半分閉じていたけど、途中からだいぶテンションが上がっていたみたいだった。最後の方は千夜ちゃんにオセロで勝てるまで十回連続で勝負を挑んでいた。

「や、やつと勝てた……」

「おめでとうシャロちゃん。これでシャロちゃんは私に好き放題できる権利を手に入れたわ。さあ、何をするのかしら？」

「そんな権利をかけた覚えはないんだけど。だいたいやることも命令することも思い浮かばないんだけど」

「服を全部脱ぐよう命令してもいいのよ？」

「するかっ！　いくら女どうしても十歳も年下の子にそんな命令したら逮捕

よ、牢屋送りよ！」

「その時は私も一緒に牢屋に入るわ」

「やめなさい」

シャロちゃんは千夜ちゃんの方に、じつと睨にらみつけながら近づいていき、千夜ちゃんのほつぺたをつまんでウニヨンと伸ばし始めた。

「ひやろひや、ひはいっ」

千夜ちゃんの叫びを聞くと、シャロちゃんは手を離し、人差し指を千夜ちゃんの鼻先に突きつけた。

「いい？ 悪ノリはやめなさい。これが千夜への命令。破ったらデコピンだから」

シャロちゃんの宣告に千夜ちゃんはぽかんとして、それからしばらくした後、突然笑い始めた。

「どうしたのよ千夜」

「どうしたの千夜ちゃん？」

「うふふつ、ごめんなさい。さっきのシャロちゃんの言葉が元々のシャロちゃんと同じセリフだったから」

「そうなの？」

私が聞くと、千夜ちゃんは頷いた。目尻になぜか涙が浮かんでいた。

「ええ。幼い頃に遊んでいた時にね、似たような言葉を言われたの。……結局守れずに何度もシャロちゃんにちよつかいを出して怒られ続けてるけど」

「そこはちゃんと守りなさいよ……」

シャロちゃんが昔の記憶通りの行動をしたことが、少しだけ記憶を取り戻しつつあると言えるかはまだわからない。でも、前よりも打ちとけられたから、記憶が完全に戻るのには役立ちそうだった。

ちよつと喜びつつ、ちよつとしんみりしつつ、この日の活動は終わった。

その日は、思ったよりも早く訪れた。

この世界にたどり着いてからちよつと一週間経った夜のこと、その日はティッピーを介してココアお姉さん（仮）と一緒におしゃべりをしていた。

たった一週間で、シャロちゃんが住むこの街の中心街はほぼ巡り終え、いろいろなお店で楽しみ、これからのラビットハウスや甘兎庵でのお仕事に役立つことを学べた。青山さんはお花屋さんでお仕事をしてお給料を日々もらいつつ、この世界での私達の出来事を小説としてしたためてみたい。

「そうそうそれで私が——、あれ？」

喋っていたシャロちゃんが不意に固まり、急に不安そうな表情になって私の

方を見てきた。

「……ココア、千夜？」

「どうしたの？」

「何かあったのシャロちゃん？」

シャロちゃんはその質問に答えることなく視線をさまよわせて、そしてもうひとりの方を見てつぶやいた。

「リゼ、せんぱい……？」

「シャロ!? ひよつとして」

「せんぱい……っ!」

シャロちゃんがリゼちゃんのことを『先輩』と呼んだ。ということは、そういうことだった。

「シャロちゃん、……お帰りなさい」

シャロちゃんは口をもごもごさせながら、泣きそうな顔でこくんとうなずいた。

しばらく経って、ひとまず落ち着くことができたのか、シャロちゃんが恐る恐るといった感じで口を開いた。

「まず、どうして私はみんなより十歳も年をとっちゃってるのかしら？」

『その理由はこのお姉ちゃんが説明してあげよう！』

「私にとつては妹よ。頭での認識はみんなと同じ歳に戻ったけど、一応今までの記憶と身体はまだ二十八歳だからね」

『……お姉ちゃんは傷つきました。貢ぎ物を受け取るまでお部屋にこもりま
す。さよならガラガラ〜』

そう言うなり、ティップピーがぴよんぴよんはねてどこかに行つてしまい、慌

てて追いかけたら、手が届かない食器棚の上にちよこんと載っかっていた。

『っーんっ!』

後ろを向いてしまっているティップー——の向こうにいるココアお姉さん（仮）にシャロちゃんが言葉を繰り出した。

「同じ二十代なのに大人気ないわね、『お姉ちゃん』?」

それは私にとつての殺し文句。これを言われたら私はどんな世界の私でも絶対に機嫌が直るに違いない。そしてココアお姉さん（仮）も例外じゃなかったみたい。

『……お姉ちゃん、つて呼んだ?』

「呼んだわよ?」

『……ぴこーんっ!! お姉ちゃんのやる気がプラス百億になりました! 機嫌を直してあげます。えへん!』

「はいはい」

「……完全に茶番だな。どの世界のココアも全く変わらない」

「そうねえ」

「ま、それでこそココアなんだけどな」

『こほん。シャロちゃんが一番だけお姉さんになっている……大変な事態になっていたのは、簡単に言うとな今回の世界の衝突の時に時間も過去や未来に進んだ状態でみんなが放り出されたから、だね』

「いきなり話の腰を折って悪いんだけど、あなたさつき『ずるい』って言いかけたのよね？」

『ケツシテソノヨウナジジツハゴザイマセン』

「棒読みになってるわね。目が泳いでる様子がばっちり想像できるわ。……」

ま、いいけど」

お姉ちゃん度で勝負するなら、この勝負は圧倒的にこの二十八歳のシャロちゃん勝ちだった。他の世界とはいえ自分の悪口を言うのは悲しくなるけど、今のココアお姉さん（仮）は「ココアお姉さん（偽）」になっちゃいそうなくらいお姉ちゃん度が爆下がりがりだった。とても悲しい。

「まあ、時間もめちやくちやになつて飛ばされたとか、結構身もふたもない理由ではあるな……」

一番分かりやすく、でも分かりにくい答え。特に一番謎なことがひとつあった。

「はい！ お姉ちゃんに質問があります！」

『素晴らしい心掛けだねココア君。特にお姉ちゃんって呼んでくれたところ！』

「えへへ」

「茶番はいいから進めろ」

「『はい』」

「ここにいるシャロちゃんは二十八歳だけど、これってその世界の衝突？　つてやつの人に一人だけ十年前に飛ばされて、そこから私達より十年長く人生を送ってきたってことなのかな？」

『うーん……実はそこはよくわかってないんだ』

「そうなの？」

『まだ研究が進められている途中なんだ。シャロちゃんの今の感覚としてはどうなのかな？　二十八年生きてきたような感じの記憶になってる？』

「それがよく分からなくなっちゃったのよ。今の私の認識だと、みんなと一緒に

だった最後の時まで記憶に、今この場所での記憶がなぜか四か月分くらい無理やりくつついちゃったみたいな感じ。さつき思い出すまでは二十八年普通に暮らしていた記憶しかなかったはずなんだけど」

『なるほど。これは興味深い証言だね……これはとても面白いことが分かりそうだけど、ひとまず後におこうかな』

「すごい、まるではかせみたい」

『ふふふふ……』

完全の上機嫌になったココアお姉さん（仮）は鼻唄を唄いながら滔々とうとうと語り始めた。それに先立って、手元のスマートフォンに資料が転送されてきたけど、一時間の動画が全部で十五本、資料のファイルが三百ページ分もあった。

「おい大きい方のココア」

『何かなりゼ君？』

「この送ってくれた大学の授業みたいな資料と動画の山なんだが、今からこれ全部やるのか？」

『ごめんごめん、うっかり全部送っちゃったけど、ひとまず暇になった時にちらつと覗いてくれたらいいよ』

「わかった」

『それで、シャロちゃんは肉体的に二十八歳で、精神的にも元々のところからそこそこ歳をとった感じになってる。他のみんなも多少はそうした時間的ながら起きちゃって、たとえばそつちの私は今十八歳だから二歳のずれ、リゼちゃんと千夜ちゃんは幸い一か月か二か月のずれだった』

「そうなの？」

『うん。それで、このままだとシャロちゃんだけ先におばさんになっちゃ

——』

「ココア？」

シャロちゃんのいる方からドスの効いた低い声が聞こえた。顔は笑っているけど、なんとというか、笑顔を張りつけたお面みたいになっちゃってた。そしてオーラが怖い。背後に鬼のお面が浮いているように見える。

その様子を感じ取れたのか、ココアお姉さん（仮）が慌てて軌道修正した。『大変失礼いたしました。オトナな女性になっちゃうから、この世界でいったんみんなの年齢を元々の世界の通りに揃え直すことにしたよ。ついでにいろいろな場所の食い違いを元通りにする。その理論を三日で編み出したのだ！』

「すごい！」

「すごいな」

『もつと褒めてくれてもいいよ！ うふふふふ』

なんかとてもお茶目だけど、元々の世界での私のお父さんやお兄ちゃんみた

いに頭が良くて、少しは見習いたいなと思った。後で送ってくれた資料を読んでみよう。

『急だけど、明後日の夜に世界を揃え直す作業をやるよ。そっちの私にも協力してもらって進めようと思う』

「らじやー！」

『介入操作はできるだけ少なくしたいから、みんなで木組みの街に移動してほしいんだけど、大丈夫？』

「だいたいよばないです……お金が……」

『うーん……わかった。そこから木組みの街まで移動させるのもセットにする……ちよつと組み直さなきゃな……』

「「よろしくお願ひします」」

「さて……あつ、そうだった！ リゼ先輩すみませんでしたっ！ 呼び捨てにした数々の無礼、すべてリゼ先輩の思いのままに断罪してください——」

「落ち着けシャロ、私はそんなことは気にしない。むしろ……ちよつと新鮮で、何だかいいなつて思つてしまった」

リゼちゃんがちよつと恥ずかしいながら答えた。

「なるほど！ だからリゼちゃん、シャロちゃんから名前を呼ばれる時一瞬嬉しそうな顔してたんだね。なるほどなるほど……」

「私そういう顔してたのか？」

「してたよ？」

「なんかちよつと恥ずかしいから忘れてくれ……」

次の日は大掃除だった。私達の年齢を揃え直す世界の改変ですべてがあるべ

き姿に戻るから、何もしなくても何とかなるところではあったけれど、一応できる限りの整理はしておきたかった。

みんなで一週間ほど過ごしたシャロちゃんこの世界での家は、とても秘密基地みたいな感じがして楽しかった。

「あつちのココアがやる魔術っぽい何かで、私がここに住んでいた痕跡もなくなっちゃうのかしら」

「たぶん」

「ちよつと惜しい気もするな。今の記憶の通りなら、少なくとも四か月くらいはここにいたわけだし。……すべてが終わったら、またここに来てみようかしら」

「いいと思う！」

掃除を終えて、最後に街をめぐるって、今日は早めに寝た。

次の日、世界を揃え直す日の当日。日が沈む頃にこの街の山の頂上まで登った。この街に来たばかりの日に登った時は、昼間の景色の綺麗さに圧倒された。今広がっているのは夕暮れから夜に移り変わっていく街の姿だった。

「夕焼けの空に街が輝いていて、なんだか神秘的だな」

「ええ……」

ティツピーは前来た時とは打って変わって、静かに私の手元にすっぽり収まっていた。

『はろはろ。みなさんお揃いかな?』

「うん。指定された通り、この街の山のでっぺんに来たよ」

『景色はどう? ティツピーを紹介する形だと、視覚情報が入って来ないんだよねー』

「とても綺麗！」

『いいなー。私の前には本と書類とエナジードリンクの空き缶の山があります。……チノちゃんに見つかつてぐーで殴られる前に証拠隠滅しなきゃ、え、あ、チノ、ちゃん？ これには深いわけがああああああああ』

ココアお姉さん（仮）の断末魔の叫びとともに通信が途切れ、次に戻ってくるまでに十五分かかった。

『お待たせ……』

「大丈夫？」

『はい……大丈夫はお姉ちゃんの義務です……』

声がるまるでポコポコになった時みたいにくぐもつていて、返事からも大丈夫じゃないのは明らかだったけど、ここは何も聞かなかつたことにした。

『今回はそつちの私が術式用の触媒を持っていない、というか世界の接続に巻

き込まれてこの世界のラビットハウスに戻っちゃってるから、大部分をこちらから制御するね』

「触媒って何のことなの？」

「シャロちゃん聞いてくれる？ ラビットハウスにあったサキさんのマジックステッキがそれなんだけどね……何をどうやっても暴発して私のおなかを撃ち抜いてくるんだ……私何か悪いことしたのかな……」

「大変ね……もしかしてココアのおなかを事前にステッキで撃ち抜くことで魔術？ つぼいのが発動する条件が整ったりするのかなしら」

「やだよそんなの……」

あんな痛い思いはやめてほしいけど、下手したらあと三人見つけるのに三回はダメージを受けることになるのかな。

『みんな準備はいい？』

「大丈夫だ」

「問題ないわ」

『じゃ、行くね』

「あ、例の呪文っぽいのはやるの？」

『やらないよ？ 実はあるを叫ばなくても行けるようにする改造が今朝仕上がったんだ！』

「……ひよつとして改造後のテスト無しのおっつけ本番？」

『大丈夫大丈夫、お姉ちゃんに任せなさい！』

そこから反論する機会は与えられず、すぐにまわりが光り始めて風が起こり、スツ、と身体が軽くなった気がしたのと同時に視界が光で満ちた。

光や風が落ち着いて、あたりがよく見えるようになった。暗い世界に街の明かりが輝いていた。とてもよく見慣れたその光景は。

「ここ……私たち、木組みの街に帰ってきたのかしら？」

「ああ……風景は私たちがよく知る木組みの街だし、この感じはとても身体に馴染む空気だ」

千夜ちゃんのつぶやきに、リゼちゃんが感慨深げに返した。

「私の身体と年齢、あの大きくてハカセっぽい異世界のココアの言った通りに戻ったのよね……？」

シャロちゃんの姿がいつも見慣れた姿に戻っていた。私の身体自体はあまり変わったようには感じないけど、ココアお姉さん（仮）と私の『まじゅつ』がうまくいつているなら、十八歳から十六歳に戻っているはず。

ひとまず、シャロちゃんに問題ないことを伝えた。

「うん、シャロちゃん。私から見たらいつものシャロちゃんだよ！」

「なんかこつちのココアの判定だとちよつと心配になるわね……」

「ガーンッ！」

シャロちゃんの容赦ない言葉が心に突き刺さつて、エネルギーがゼロになつてしまった。

地面にうずくまっていると、千夜ちゃんがとことことシャロちゃんの方に歩み寄つてじつとシャロちゃんの姿を眺め、それからさらに距離を詰めてぎゅつと抱きしめたのが見えた。

「千夜!?!」

「……ええ。まぎれもなく私達と同じ歳のシャロちゃんね。身長、見た目、そして抱きしめた時の感触とか」

「感触言うな！」

シャロちゃんが叫びつつも、おずおずと千夜ちゃんの背中の方に手を回して、きゅ、と抱きしめ返した。

「……千夜」

「シャロちゃん……」

二人の表情はよく分からなかつたけど、頬に流れた一筋の涙が月明かりに照らされて光ったのが見えた。ようやく本当に『再会』できた二人を見ているうちに、私も泣けてきた。ハンカチを探していたら、いつの間にか隣に来ていたリゼちゃんが貸してくれた。

涙を拭いてようやくよくあたりを見る余裕ができたところで、青山さんが何かを熱心に書いて……うん、あれは『描いて』るのかな？ 一心不乱に手を動かしているのが視界の端に映った。近付いてみたらスケッチしていると分かったので、ささやき声で何を描いているのか尋ねた。

「千夜さんとシャロさんの感動の再会を見ていたら、涙が出てくるのと一緒にインスピレーションも沸いてきました〜、ここは情景をキャッチしたいと思ってスケッチをしています〜」

青山さんもささやき声で返した。

「青山さんは絵も超上手なんだな」

「ええ。時々イラストや漫画を描きます〜」

「そうなんだな。初めて知った」

みんなが落ち着いたところで、ひとまず一緒にラビットハウスに向かって、今の状況を整理することに決めた。みんなと一緒に慣れた道を歩くと、楽しいのと同時に、とても安心できた。でも、ここにはまだみんなは揃っていない。チノちゃん、マヤちゃん、メグちゃん。中学生の三人組を早く見つけて迎え

に行かないといけない。みんなに会いたい、その中でも、もっと強く会いたい相手の名前が、ふとこぼれた。

「チノちゃん……」

まだ、どこにいるかも分からないけど、きつと、必ず、迎えに行くから。

（『セカイにひとり』 中巻第四号に続く）

第二部

短編

「雨」

雨

雨にはいろいろあります。ふわふわただよう霧雨きりさめ、しとしと雨、本降りの雨、あまりあつてはほしくありませんが、叩きつけるような大雨。そして嵐。

雨の日は趣味がはかどります。ボトルシップは先週仕上げたので、今週はクロスワードパズルに取り組みます。当てはまる言葉を思い浮かべながら、無心に粋を埋め――

「チーノちゃん！ 遊びに行こ♪」

嵐が襲来しました。

「外は雨ですよ」

「小降りだよ？ だから大丈夫！」

「何が大丈夫なのかよくわかりません。今日はクロスワードの日と決めているんです。今まだ二つしか言葉を書き入れてません」

「じゃあ解き終わるまで待つね！」

そう言うと、ココアさんは私の部屋でくつろぎ始めました。まあ、邪魔さえなければ気にしません。ココアさんがそばにいるのは、その……悪いことではありませんし。

「解けた？」

「十秒では解き終わりませんよ。まだ始めたばかりです」

「わかった！」

そう言うのと、今度はカーペットの上をゴロゴロ転がり始めました。まあいいです。邪魔にはなっていないから。

しばらく経って、難しいところに行き着きました。ちよつといい感じに当てはまる言葉が思い浮かびません。いくつかりストアップして、しこうざくご試行錯誤していいくしかありませんね。

「お困りのようですね？ チノちゃん」

ココアさんがいつの間にか身を乗り出してきていました。

「手出しは無用です。じっくり考えるのもパズルの楽しみです」

「そのヨコのカギは——むぐつ」

慌てて手でココアさんの口を押さえました。ココアさんは文系科目は苦手らしいんですが、こんなときはうっかり正解を言ってしまうような気がします。

「手出しをしたら今日一日口を利きません」

「はいっ、わかりました！ 絶対手も口も出さないよ！」
ちよつと準備してくる！ そう言つてココアさんは自分の部屋に行つてしま
いました。

——ふう、こんなところでしょうか。無事に解けました。解けると気持ちい
いです。

「おめでとうチノちゃん！」

「ココアさんいつから見えてたんですか!？」

「十分くらい前からだよ？」

「ぜんぜん気づきませんでした。」

「じゃあちよつと公園まで行くから準備して！」

「やっぱり外に行くんですか……。」

「損はさせないよ！」

……あまり断るのもなんですし、ちよつとお付き合いましたよか。

外は相変わらず小降りですが、だいぶ明るくなってきました。ココアさんはスキップしながら通りを歩いていきます。私はその後を少し早足で追いかけているのですが、ティッピーを載せていないのでちよつとバランスが取りづらいです。

公園に着くと、雨だからか、うさぎたちが木陰に固まっているのが見えませんでした。でも少しずつ日が差してきているので、もうすぐ止むでしょう。

「うん、ちょうどいい頃合いだね！」

「何がです？」

「それでは、後ろを見上げてください」

じゃじゃーん！ ココアさんが下手な効果音つきで後ろを指差しました。

「ふわああああー……」

木組みの街の上に、大きな七色のアーチがかかっています。

「前はちよつと雰囲氣ぶち壊しちゃったから、今日はリベンジしてみたよ」

「おてんとさまのよだれつて呼んだあれですか？」

「えへへ……」

ちようどいい感じに雨が上がってくれてよかったよ！ ココアさんはそう言う
うと満面の笑みでピースサインをしました。

さすがお姉ちゃん、と思いましたが、その言葉は出しませんでした。お姉
ちゃんという言葉聞いた瞬間抱きしめてきて、暑苦しくなってしまうから
です。

あとがき

はじめまして。あるいはお久しぶりです。麦と申します。インターネット上ではより詳しく識別するために「麦（穀物P）」と名乗ったりしています。

「セカイにひとり」中巻第三号をお送りします。メチャクチャな構成ゆえ中巻がガンガン分割されています。おそらく中巻は第五号まで行くと思います。コアさんが探しているみんなの人数からお察しいただきましたら幸いです（？）です。

今回は冬コミ（落選）で出す予定だった話です。夏コミ向け作業開始時点で60ページほどの執筆済原稿があつてこれは余裕だと思つていましたが、その次の週に体調不良に襲われました。最初に病院に行つてから診断が確定するまでだいぶかかりましたが、「亜急性甲状腺炎」という病気でした。初期症状が風邪に似たようなもので、自然治癒する（むしろ特效薬がなくて自然治癒しか方法がない）ものの、完全に落ち着くまでに三か月かかるとのことでした。そのため、この本の完成は自分の中で結構危ぶまれていました。でも書けたのでOKです。

今回は元氣ハツラツなあの子です。その元氣をオラに分けてくれ。

セカイにひとり ―遠く散ったみんなを探して― 中(三)

著 者：麦（穀物P）

発行元：麦之穂

サイト：<https://muginoho.ehoh.net/>

連絡先：circle_muginoho@aotake91.net

発行日：二〇二四年（令和六年）八月十一日

印刷所：ちよ古つ都製本工房 (<https://www.chokototo.jp/>)